

西の菜時記

平成30年8月20日発行
第49号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

特集：長州藩主毛利敬親・おごうさんアルバム

山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360



ほんとうに
やってみれば
わからない

敬親は西洋の発明品などを取り入れようと家臣にあれこれやってみよと言いました。会計方を通すとややこしくなるということで、お手紙をいれわゆるポケットマネーを惜しげもなく使われたそうです。うまくいかなくても責めることなく「しきりにやってみよ」と言ったそうです。



みぬく力、
洞察力は
家臣にまさる



せいぞに
甘えていたら
喝っ!



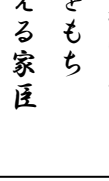
りかいある
殿をもち
甘える家臣



らんがくにも
あれこれにも
興味持ち



やむをえぬと
許したくない
尊王攘夷魂



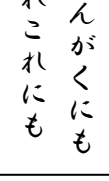
禁門の変で長州藩は朝敵とされ、切羽詰まる状況になったので、重臣たちが、外国艦隊との和議を勧めましたが、敬親はジロリジロリとみなをにらみながら「今日に至って和議とは」と到底受け入れられないといった態度を示しました。



江戸長州藩下屋敷で、毎月1回、蘭学に通じた村田蔵六(後の大村益次郎)らを集めて酒席を持たせ談話させました。彼らは浪士で蘭学に精通していることから他藩に雇われ交友関係も広く、時事を聞き知るのに便利でした。敬親は同席の家臣に記録をとらせ情報を得ることに余念がありませんでした。



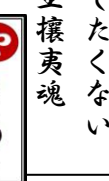
家臣の周布政之助は、酒に酔うと殿の前でも憚らず暴言を吐くことがありました。お付きの者はヒヤヒヤしながら殿様を気遣ったようですが、敬親はいっこうに怒ることなく、家に帰って酔いがさめたら気がつくであろうと寛大な態度でした。



他藩から来た剣士に藩の師範が散々に負け、切腹してお詫びを言いました。「腕前が鈍くてつまらぬものだから負けたのである。つまらぬ者がいくつ腹を切ったからと役に立たぬ。今から一層稽古をすればよい。勝ちさえすれば名譽になる。負けたところへ稽古に行ったらよからう。」そう言って師範の他国修業を奨励しました。



明治元年四月、木戸孝允が版籍奉還の説明をしたところ、敬親は「なるほど、もつともなことだ。しかるべく取り計いをせよ。」これは敬親が藩主という身分がなくなることもあり、木戸はまさかの同意に感涙して下がるうとしたら、さらに「混乱を招かぬよう時期を見計らって肅々へ行え」との助言まで受けたそうです。



(版籍奉還：藩主が土地と人民を朝廷に返すこと。)



菜香亭下の間 敬親のエピソードをかるた形式でわかりやすく紹介

毛利敬親(1819~1871)は、長州藩の第13代藩主です。第10・11・12代藩主がたてつづけに亡くなったので、1837年満18歳という若さで思いがけず藩主の座に就きました。そのころの長州藩は天保元年以降の自然災害による大飢饉で財政破たん寸前でした。そこで敬親は村田清風などを登用し大胆な改革に乗りだしました。慣例をあらため家格にこだわらず質素節約や流通改革をすすめさせ、財政再建を行い十年余りで立て直しました。

知られざるキャラクターに迫る
長州藩主 毛利敬親



◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

<市民ギャラリー出展作品の紹介>

第8回レジャフラワー&アガバドフラワーアレンジメント作品展

~山口の春彩~ -アガバドサークル「アガバド」- 4/14~4/15



第3回ひろまり絵画教室展~創造豊かな山口の子供たち~

-ひろまり絵画教室- 6/23~6/24



出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。
(お問い合わせ) TEL:083-934-3312

歴史感じて...押し花展

-ワールドプラスフラワー協会花よみ- 6/7~6/10



<平成30年度 市民ギャラリーの予定>9・10月

月日	時間	タイトル	主催者
9/7 ~9	10時~17時	第2回創作展「快作楽 ~幕末維新をテーマに ~	NPO 法人 防長史楽会
10/17 ~22	10時~17時 (初日のみ 13 時から、最終 日のみ 15時ま で)	カラ-魚拓展 in 山口 ~額の中の水族館~	カラ-魚拓 山口県教室

天花畑の石体子安観音堂

てんげばた せきたい こやすかんのうどう

萩往還一番の難所である一の坂四十二の曲がりの入り口付近にある天花畑に小さな観音堂がある。看板には「石体子安観音堂」とあり、安産の仏さまとして敬われている。

何故このようなところに安産の仏さまとして観音菩薩があるのかと、萩往還を歩いている時不思議に思っていました。

看板に書いてあった由来を読みると「この地に大宝二年(702年)に牧島山棲岩寺(せいがんじ)が創建され、本尊は石体の観音菩薩で、古来、安産の仏さまとして近在の婦人層に尊崇されていた。」とのこと。

面白いことに側を流れている小さな小川の乳安川(ちちやすがわ)の水をさかのぼってすくうと母乳が止まり、流れに沿ってすくうと母乳が出るとのいわれがある。

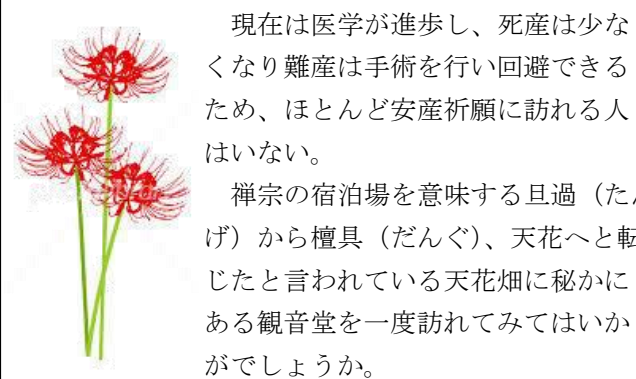
又、第29代当主大内政弘の夫人が難産し、観音様に祈って出産した男児が第30代当主の義興であったとの伝説がある。

しかし、棲岩寺も永禄十二年(1569年)の大内輝弘の乱により焼失し、のちに近郷の人々により、現在の小さなお堂が建立され、今もって安産の観音様として尊信を受けている。毎年8月1日にはお祭りが行われているとのこと。

お参りがてら観音堂の中を覗いてみると、高さ20センチほどの小さな観音像が安置されていた。

現在は医学が進歩し、死産は少なくなり難産は手術を行い回避できるため、ほとんど安産祈願に訪れる人はいない。

禅宗の宿泊場を意味する旦過(たんげ)から檀具(だんぐ)、天花へと転じたと言われている天花畑に秘かにある観音堂を一度訪れてみてはいかがでしょうか。



一の坂川を過ぎ、上天花町公会堂の上方に立派なお堂がある。乳安川よりお堂を望む。